

## マシュー・アーノルドの詩の定義と批判の態度

井 上 正 名

F・R・リーヴィスは、ジュラード・マンリー・ホプキンスがロバート・ブリッジズにあてた手紙の一節を冒頭に引用して、マシュー・アーノルドについての論文を書き始めている。その手紙の文句は次の通りである。

そして私は貴方がマシュー・アーノルドをキッドグラブ・コックシユアと同じような者だと云うのには感心できない。私はアーノルドと意見を異にし、彼が間違っていると思うについては貴方よりも多くの理由を持っている。しかしそれにもかかわらず私は彼が稀れな天才であり、偉大な批評家であることを信じて疑わない。

彼はこの引用に続いておよそ次のように述べている。ブ

リッジズがアーノルドに対して敵意を持っていたのをここでホプキンスが非難しているのが、この敵意はアーノルドに関する限りなじみのものである。この敵意は、彼についての批評として残っているものの多くを特徴づけている。しかし、そのような敵意を全く持たぬにしても、彼に関して公正な評価を下すのが妙に困難であるのを人は感じるのである。彼には彼を評価せんとする読者にとって極めてつかみがないところがある。自分は彼を称讚するものであるが、少くとも自分は彼に関してそのように感じて来たし、現代の最も重要な文芸評論家(T・S・エリオット)の経験したところのものも私のそれとほぼ同じであろうと思いたい。T・S・エリオットは *The Sacred Wood*

において、アーノルドのことを大いなる敬意をもって語りつつも、彼のことを「批評家であるよりも批評の宣伝家である」といつており、自分にも長年この考え方が疑う余地無く正しいものであると思われた。果して批評家としてのアーノルドの業績は真に感銘を与えるものであろうか。彼の弱点といらだたしきトリックを人は忘れることができな。T・S・エリオットがまた他の論文で次のようにいうとき、人は確信をもって抗議することができるのであろうか。

アーノルドは論理の首尾を一貫させたり、はつきりと定義したりする才能がほとんどなかった。とにかく論理的に長く考え続ける力がなかったので、その進み方はちょっとずつ行くがおなじところをまわっていた。

だからアーノルドが散文で書いたものはどれもこれも綿密な分析には堪えないもので、たくさん言葉を書いて書いてあっても実際の内容は本当に貧弱だと感じるのが当たり前かも知れない。<sup>①</sup>

更にそれに続けてリーヴィスは語る、もしこれが真実であつたら、我々がアーノルドの書物をそれほど頻繁に開くのは何故であらうか。我々には上に示されたようなアーノルドに対する評価を否定しがたく感じながらも、尚やはり彼

を、批評家として認められている者の中で最も生命に満ち、かつ我々にとって最も有益な人物であると考えるのであり、それこそまさにアーノルドに関して甚だ奇妙に思われる点である、というのである。

リーヴィスは上のように述べた後アーノルドに関して問題にされる難点をいくつかとりあげて論じて行き、最終的にはアーノルドを偉大な批評家であると考え、T・S・エリオットとコールリッジのみが彼にまさるとするのである。<sup>②</sup>

アーノルドを秀れた批評家であると考えつつも、彼の種々の難点に気づかずにおれぬという点では私はリーヴィスに全く同感である。私はここでは特にアーノルドが下しているところの詩の定義について考えてみたいと思う。リーヴィスが引用しているT・S・エリオットの言葉に、アーノルドがはつきりと定義を下す能力を持っていないという意味のことが見えるが、アーノルドが下している詩の定義に関して見る限り正にその通りであると思われる。

さて、アーノルドは詩の何たるかについて、詩は人生の批評であるとか、詩は自然と人生を解釈するものであると考えている。たとえば次の如き表現が見られる。

従つて、次のことをしっかりと心にとめておくことが必

要である、即ち詩は根底において人生の批評であるということを、そして詩人としての偉大さは、人生に、つまりいかに生くべきかという問いに思想を力強く美しく適用することのうちに存するのだということ<sup>⑤</sup>。

ところで詩は人生の批評なりとの考え方は有名であると同時に甚だ評判の悪い考え方である。さきのリーヴィスもこの定義が不評であることを認めつつも、アーノルドがこの表現によって詩を定義せんとしたのではないのであり、これを悪しき定義なりとする全ての非難が見当ちがいであることを指摘する必要すらないと考えている。彼はアーノルドのこの表現は、芸術のための芸術という考え方と逆の立場、即ち芸術と人生を結びつけんとする立場を示すものであり、詩を評価する基準をどこに求めるかを主張せんとするものであって、決して非難に値いせぬものであると述べている<sup>⑥</sup>。

私もこの定義が詩の定義として適当であるかどうか、あるいは文芸評論家としてのアーノルドについて評価を下すにあたりこの定義が不利な材料になるかどうかということの問題にするつもりはない。この定義が結論的に正しか否かとは別に、この定義の意味するところが不明確であり、その点において、この定義が定義として甚だ不十分なもの

であることをまず明らかにしたい。何故不十分であり、不明確であるかといえ、この定義において用いられている批評という語が英語において普通用いられている批評 criticism という語の意味とはいささか異った意味で用いられていると思われるのであるが、その点について何の説明も為されていないからである。The Oxford English Dictionary で調べてみても、criticism と批評は The action of criticizing, or passing judgement upon the qualities or merits of anything (criticize すること) なのかあるものの質、功罪について判断を下すこと) というような説明しか出ていない。更にこの説明に用いてある criticize という語の説明を見ると to pass judgement upon something with respect to its merits or faults (長所あるいは欠点という観点から判断を下すこと) という説明が出ている。従って、詩が人生の批評であるという場合、詩とは人生そのもの、あるいは人生に関するなにかについての是非善悪美醜の判断を言語で表現したものであるということになるであろう。しかるにリーヴィスも述べている通り、アーノルドが詩に「教義を求めたり、人生についての倫理的注釈や言葉に表現された批評<sup>⑦</sup>」を求めているのではないことは明らかである。たとえば人生の批評たるものにいかなる力が

あるかということについて次の如き言葉が見られる。

私は現代において哲学詩人や哲学的道学者が出現して我々のために明確な表現をもって、近代科学の成果を行動と美の本能とに関係づけるのだといっているのではない。そうではなくて、私の意味するのは、もし我々がかって世において考えられ語られた最も秀れたものを知るなら、ずっと昔に生き、自然について甚だ限られた知識しか持たず、多くの重要な事柄について甚だしく誤った考え方を持っていた人々の芸術、詩、雄弁が、事実我々を元気づけ喜ばせる力を有するのみならず、我々の精神をたくましくし、我々を高め、知性の働きを活発ならしめ、示唆を与え、近代科学の成果を行動と美に関する我々の必要性とに関係づけるのを驚くばかりに助けてくれる力を有すること、そしてそれらの作品の著者が示す人生の批評はその本質においてかくの如き力と価値を有するのであることを我々は経験的事実として知るであらうということなのである。

これは、トマス・ヘンリー・ハックスリが、近代自然科学の宇宙観は、人間がこれまで抱いて来た宇宙観を根底からくつがえすものがあるが古典教育はそうした宇宙観の転換に何の役にも立たぬと云って文学中心の教育を批判した

のに対して、アーノルドが彼の見解を述べたものの一部である。アーノルドは自分の習得したものを相互に関係づけ規則、原理のもとに配せんとするものであり、またそのように知識の範囲内において相互の関係づけを必要とするのと同様、知識とそれ以外のもの、即ち美的感覚と行動の問題との間にも相互の関係づけを必要とするのであると考え、そうした知識とそれ以外のものとの関係づけを為しうるのが秀れた文学、とくに古典文学であると述べているのである。そして彼の表現を用いるなら、古代の詩人や古代の文人による人生の批評にそうした力があるということになる。しかも近代科学の成果を美的感覚と行動の問題とに関係づける力があるというのである。ということであるなら、人生の批評なるものが我々にとって意味を有する所以のものは命題として述べられている思想、あるいはそういう形で述べられうる思想にあるのではないということになるであらう。即ち、このような文脈において人生の批評という言葉が用いられる場合、さきに辞書の語義に即して見た「人生あるいは人生に関するなにかについての是非善悪美醜の判断」というものが問題にされていないことは明らかである。

またそもそも詩が人生の批評であるといいながら、バイ

ロンを秀れた詩人なりと評している事實はいかに説明すべきであらうか。というのは、アーノルドはワーズワースとバイロンが十九世紀における他の全ての英国詩人より秀れており、二十世紀に入るとこの二人の詩人がひときわ秀れたるものとの評が定まるであろうと述べているのであるが、彼はまた「彼（バイロン）は思考を始めるとただちに子供になってしまふ」というゲーテの評語がバイロンの本質の一面をつくものであるとしてバイロン論を展開しているのである。

その他、詩は人生の批評であるとの考え方が出て来るころといくら調べてみても、リーヴィスが語っているようにアーノルドが詩に教義を求めたり、人生についての倫理的注釈や言葉に表現された批評を求めていると思わしめる箇所は見つからぬようである。しかし、英語の単語としての普通の語義とは異った意味で用いているが、かく解すべしとの説明が与えられていないのである。

これと同じことが詩は、自然、人生を解釈するものであるという考えに關しても云われうるのである。たとえば次の如き文章において解釈という語はいかなる意味において用いられていると考えるべきであらうか。

詩の偉大な力は、解釈するものとしての力に存するの

である。そのことによって私は宇宙の神秘を明確に説明しうる力を意味するのではない。事物について、

また事物と我々の關係について驚くばかりに充実し、新鮮で親密な感覺を我々のうちに惹き起こすように事物を扱う力のことを意味しているのである。我々の外なる事物に關して我々のうちにこの感覺がよび起されると我々は自らがそれら事物の本性に触れるのを感じ、それらによって当惑させられたり、圧迫されたりするのでなく、それらの秘密にあずかり、それらと調和の状態にあるのを感じるのである。その感情は他の何物にもまして、我々の心を落着け、満足を与えてくれるのである……私がいいたいのは詩がこの感覺を我々のうちにひき起こすことができるということ、そしてそれをひき起こすことが詩の最も尊い力の一つであるということである。科学の為すところの解釈は、詩のそれの如くに、事物についてのこの親密なる感覺を我々に与えてくれず、我々の特定の能力にのみ訴え、全人格に訴えることをしないのである。

ここにおいては、解釈という語は「なにか理解しがたいもの、明らかでないものを説明する」というような普通の語義通り用いられているとは思いたい。

ところが「人間は人生の解釈を求め、慰められ支えられることを求めています。詩に向かうようになるであろう。我々の科学は詩がなければ不完全なものであることが明らかになるであろうし、また現在宗教及び哲学として通用しているものの大部分は詩によってとってかわられるであろう」<sup>⑩</sup>とか「人間の倫理的・精神的本性にかかわる内世界の概念と法則を、靈感にみちた確信をもって表現することによって詩は解釈を行うのである」と語られるとき、解釈という語が普通の語義通りに用いられているように思われる。そして詩とは思想を表現するものであり、詩においてはその思想が問題であるということになりそうである。しかしもしそうであるとすると彼が他の多くの箇所でも語っていることに甚しく矛盾することになる。たとえば、彼はワーズワースがシェイクスピアとミルトンを除いて他の全てのエリザベス朝以降の詩人より秀れた詩人であり、モリエールの死後現われたヨーロッパの詩人の中で、ゲーテを除いて最も秀れた詩人であると考えているのであるが、その根拠はワーズワースが他の詩人たちより人生をより多く扱い、全体としての人生をより強力に扱っていることにあるとされている。ところがそのワーズワースについて彼は次のように語っている。

ワーズワースの崇拜者たちは、称讃すべきでないものをとらえて称讃しがちであり、彼らが彼の哲学と呼んでいるものに強調をおきすぎる傾向がある。彼の哲学は——少くともそれが〈学問的思想体系〉という体裁を持つ限り、そしてその度が強まればそれだけ一層——イリュージョンである。おそらくいつか我々はこの命題を一般化して、詩は真実であり、哲学はイリュージョンであると言うようになるであろう。<sup>⑪</sup>

このようにワーズワースの哲学のみならずそもそも哲学なるものをこのように低く見る彼は、ワーズワースの偉大さについて次のようにも云っている。

ワーズワースの詩は、自然のうちに与えられる喜びや単純で根源的な愛情とか義務とかのうちにある喜びを感じる非凡な能力によって、そしてまた彼が次々この喜びを我々に示し、我々をしてその喜びをわかつしめる非凡な表現能力によって偉大なのである。<sup>⑫</sup>

即ちアーノルドは、詩は人生を解釈するものであると考へながら、ワーズワースはある感じる能力と表現の能力によって偉大なのであり、思想によって偉大であるのではないと考えているのである。このように見て来ると、「詩は人生を解釈するものである」という場合の「解釈」という

語が普通の語義通りに用いてあるとすれば、他の多くの箇所において表明されている彼の考え方と著しく矛盾するところになるのは明らかであるし、もし普通の語義通りに用いていないのならその意味を明らかにし、その語を用いることの妥当性を示すべきであろう。要するに、解釈という語をいかに解すべきであろうと、詩は自然、人生を解釈するものであるという定義は不十分なものであることは明らかである。

しかし私はここでアーノルドが詩について下している定義が不十分なものであることを示すにとどめておきたい。更に、この不十分な定義をいかに解釈するか、またいかに評価するかということも問題にさるべきであろうが、次に私はアーノルドに関する限り詩の定義は批評家としての彼の仕事に殆ど影響せぬということを明らかにしたいと思うのである。ある作品が彼の定義にかなっているかどうかということによって評価を下すのではなく、詩というものは単に人生の批評であるだけではだめであるとか、単に思想を人生に適用したものであるだけでは詩として秀れたものたりえぬというのが彼の態度である。実は「詩は人生の批評である」といっても条件があるのであって、たとえば「詩のうちに、即ち詩的眞実の法則と詩としての美しさの

法則にかなったものとしての人生の批評のうちに、我々の精神はますます慰めと支えを見出すようになって行くであろう」というような表現が見られるのである。

あるいは、詩に限らず散文も含めて全ての文学の目的とするところは人生の批評であると語った後、「しかしながら詩においては人生の批評は詩的眞実と詩としての美しさの法則にかなって為されなければならない」と語っている。またバーンズの詩の一節を引用して、そこに人生の批評があり、人生に思想が強力に適用されており、しかもそれがたくましく知力を持つ言語の達人の手になるものであることを認めながら「しかし詩として秀れた成功作であるためには、思想を人生に強力に適用すること以上のものが必要とされるのである。それは詩的眞実と詩としての美しさの法則によって定められた条件にかなった適用でなければならぬ」と語っている。このように詩は単に人生の批評であるだけではだめなのであり、秀れた詩であるためには詩的眞実と詩としての美しさの法則にかなう必要があるというわけである。しかし詩としての卓越性がいずこにあるかを語るにあたって「詩的」という言葉を用いるのは好ましくないと思われる。数学のたとえを用いるなら、ある未知数を説明するにあたって、その説明さるべき未知数を用いて

説明するようなものである。極論するなら、アーノルドの考え方は、「詩は詩として秀れたものであるためには、詩として秀れたものであらねばならぬ」ということになるのである。彼は詩について定義を下したり、秀れた詩であるための条件に触れたりするのであるが、作品を論ずるにあたってはそうした理屈めいたものは何の働きもせず、専ら彼は詩として秀れているかどうかということだけを問題にするのである。そしてその事情は彼自身の言葉から尚一層明らかにするのである。

彼は *The Study of Poetry* なる論文の冒頭において、まず詩の重要性を強調し、詩が重要なものであるなら我々は秀れた詩を秀れたものとして鑑賞する能力が必要とされるわけであるが、どうしたらそういう鑑賞力を持つことができるようになるかということに論を進めて、有名な *Touchstone theory* なるものを示すのである。

実際、いかなる詩が秀れたものであり、従って我々に最も役立つものであるかを見出すためには、偉大な詩人の数行や表現をたえず心におさめておき、他の詩を評価する試金石 (*touchstone*) としてそれらを用いるのが最も助けになるのである。勿論我々は評価される他の詩がそれらに似ていることを求めるべきでない。

その詩は非常に異つたものであってもかまわぬのである。しかし我々が適切な才を持っているなら、それら巨匠の詩の数行と並べられた詩に、詩としての秀れた性質が備っているか否かを見分けるために、それらの数行が、信頼しうる試金石たることを知るであらう。短い一節でも、否、ほんの一行でも充分この役に立つのである。<sup>10)</sup>

彼はこういって、それに先立って引用したホーマーの二行と更にホーマーから二箇所、ダンテから三箇所、シェイクスピアから二箇所、ミルトンから三箇所引用している。そして更に続けて次のように述べている。

これらの数行はそれだけで、もし我々が適切な才とそれを用いる能力とを有するなら、詩についての我々の判断をくもりなく健全なものたらしめ、詩について誤った評価をすることから我々を守り、真の評価へと我々を導いてくれるのに充分なものである。

私がここに出した例は、それぞれ互いに非常に異なるものである。しかしそれらはこの共通点を持っている、即ち詩として最高の性質を持っているという共通点である。もし我々がそれらの力に徹底的に浸りきるなら、我々の前に示された詩にどの程度の詩的優秀さ





人間を生ある姿において描出するものを保持し、それを手ばなさぬのであって、その発展を助けぬもの、人間を固定化し腐敗したものと示す文学を拒絶し、捨て去るのである。<sup>⑨</sup>

また他の論文において、商業主義と娯楽文学が結びつき、秀れた文学が世間から姿を消すのではないかとの憂いを述べて次の如く語っている。

たとえ秀れた文学が世間からすっかり姿を消してしまっても、秀れた文学をひとりで楽しみ続けるだけで充分価値あることであろう。しかし一時的にその恐れが感じられても、秀れた文学が世間からすっかり姿を消すことは決してないのである。秀れた文学が姿を消さず秀れたものとして認められるということは保証されているのである。しかし世間が故意に意識的に選択することによってではなく、もっとはるかに深いもの、即ち人類における自己保存の本能によってかくあらしめられているのである。<sup>⑩</sup>

あるいはまた、自己保存の本能という表現は用いていないが、「人間のうちには、詩の秀れた価値と力に反応し、結局はそれを認めるように出来ているある感覚がそなわっていることを信ずる我々は云云」という言葉が見られる。

序に、批評家の職務の一つとして、人間に上述の如き感覚があるのであるから、詩人の作品のうち秀れたものを選び示して、しかるのちそれ自らをして語りしめることによって詩人についての正しい評価が生まれるようにすることを行うことを考えている。<sup>⑪</sup>更に彼が批評家の職務全てをおおうものとして語っているのは「ものを真にあるが如くに見る」ということである。また「批評なるものの偉大な仕事は自らはわきに退き、人類に決定させることである」と述べている。要するに詩人やその作品を真にあるが如くに見、その見たところを世に示すのが批評家の役目であって、詩人や作品についての評価を下すことは勿論必要であるとしても、それが批評家の最終目的であるとは考えていないのである。

さきにも述べた通り、アーノルドの下している詩の定義が不十分なものではあるが、彼が詩を論ずるにあたって、実質的にはその定義の不充分さが何ら影響せぬのである。そうはいっても不十分な定義よりは充分な定義を下す方が好ましいことはいままでもないことであろうし、彼があのような知的要素を詩に要求しているかののように思わしめる定義を下したことについては、やはり詩についての彼の好みとか時代と文学についての彼の関心の持ち方というよう

なものがそこに反映しているということが考えられるであらう。また詩を論ずるにあたって彼の好みはかなり強く出ているということも否定できぬところであろう。しかし彼が詩を論ずる際には抽象的な定義をふりまわし、その定義に合致するか否かによって作品を評価したりするのでなく、その作品が詩として秀れているかどうかという判断が先行し、しかる後に人生の批評とか思想の適用というような無理屈めいたものが付加されるのである。

勿論私は定義とか概念規定というものが無意味であるとか不必要であるといっているのではない。ある概念をめぐって議論が為されたり、ある概念のとらえ方が判断を下すきめ手になるような場合には、その概念を可能な限り厳密に規定する必要があるであろう。しかし一方我々は定義というものをあまりに重視し、定義ができぬと一歩も動けぬと思ったり、また定義を下せば事たれりと思ったりする傾向があるのである。今私は、アーノルトの下している定義が不十分なものでありながら、これが詩を論ずる妨げとならず、彼が詩の何たるかを充分に語りえずして詩の秀れた批評家であったということに深い興味をおぼえるのである。

註① T・S・エリオット(矢本貞幹訳)『文芸批評論』岩波書

店、昭和四十三年、p. 144.

② F. R. Leavis, "Arnold as Critic", *Scrutiny*, VII (1938~39), pp. 319—332.

③ Matthew Arnold, *Essays in Criticism* Second Series (London: Macmillan and Co., Ltd., 1935), p. 102.

④ F. R. Leavis, *op.cit.*, pp. 324—5.

⑤ *Ibid.*, p. 324.

⑥ Matthew Arnold, *Selected Essays* (London: Oxford University Press, 1964), p. 226.

⑦ Matthew Arnold, *Essays in Criticism* Second Series, p. 144.

⑧ *Ibid.*, p. 133.

⑨ *Essays in Criticism* First Series (London: Macmillan and Co., Ltd., 1937), pp. 181—2.

⑩ *Essays in Criticism* Second Series, p. 2.

⑪ *Essays in Criticism* First Series, p. 111.

⑫ *Essays in Criticism* Second Series, p. 105.

⑬ *Ibid.*, pp. 108—9.

⑭ *Ibid.*, p. 4.

⑮ *Ibid.*, p. 132.

⑯ *Ibid.*, pp. 33—4.

⑰ *Ibid.*, p. 12.

⑱ *Ibid.*, pp. 14—5.

⑲ *Ibid.*, p. 132.

⑳ *Essays by Matthew Arnold*, p. 465.

㉑ *Essays in Criticism* Second Series, pp. 38—9.

㉒ *Ibid.*, p. 99.

㉓ *Cf. Ibid.*, p. 99, pp. 14—5.

㉔ *Essays in Criticism* First Series, p. 217.